

参考資料

1. 科学技術基本計画（抜粋）（平成18年3月28日閣議決定） 41
2. 第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画（平成18年4月18日） 42
3. 関連データ 44
 - （1）基本的データ
 - （2）第2次5か年計画の進捗状況等
 - （3）国立大学における学生定員と必要面積等の推移
 - （4）耐震化の推進
 - （5）地球環境問題への対応
 - （6）学校施設のエネルギー消費の実態等
 - （7）高等教育の国際化
 - （8）産学連携の推進
 - （9）地域活性化への貢献
 - （10）医療の高度化や地域医療の機能強化
4. 国立大学法人等施設整備を進めるにあたり配慮が必要な
主な答申・報告等 52
5. 第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画の成果・効果の検証について（アンケート調査）【抜粋】 58
6. 諸外国における高等教育機関の施設整備方策について 64
7. 国立大学法人等施設の整備に係る費用について（試算） 72
8. 国立大学法人等の老朽施設の推計（附属病院を除く） 75

1. 科学技術基本計画（抜粋）（平成18年3月28日閣議決定）

3. 科学技術振興のための基盤の強化

（1）施設・設備の計画的・重点的整備

世界一流の優れた人材の育成や創造的・先端的な研究開発を推進し、科学技術創造立国を実現するためには、大学・公的研究機関等の施設・設備の整備促進が不可欠であり、公共的施設の中でも高い優先順位により実施される必要がある。

その際、特に大学には次世代をリードする研究者など優れた人材の輩出が要請されていることから、創造的な学問、研究の場にふさわしい環境・雰囲気醸成が求められる。

① 国立大学法人、公的研究機関等の施設の整備

国立大学等施設緊急整備5か年計画により、優先的に取り組んできた施設の狭隘解消は計画通り整備されたものの、老朽施設の改善は遅れ、その後の経年等による老朽改善需要とあいまって、老朽施設は増加した。また、平成13年度以降新たに設置された大学院への対応、若手研究者の教育研究活動スペース確保への対応、新たな診断・診療方法の開発に伴う研修・実習への対応など、新たな教育研究ニーズも発生している。

1960年代から1970年代にかけて大量に整備されてきた国立大学法人等の施設の老朽化が深刻化しており、機能的な観点から新たな教育研究ニーズに対応できないだけでなく、耐震性や基幹設備の老朽化など安全性の観点からも問題があるため、国は、老朽施設の再生を最重要課題として位置付け、長期的な視点に立ち計画的な整備に向けて特段の予算措置を講じる。

国立大学法人等において必要な整備面積は約1,000万平方メートルに達している。国は、このうち、卓越した研究拠点、人材育成機能を重視した基盤的施設について、老朽施設の再生を最優先として整備する観点から、第3期基本計画期間中の5年間に緊急に整備すべき施設を盛り込んだ施設整備計画を策定し、計画的な整備を支援する。

また、長期借入金等により整備を進めている大学附属病院や国立高度専門医療センターについては、引き続き、先端医療の先駆的役割などを果たすことができるよう、着実に計画的な整備を進めることを支援する。

国立大学法人等は、全学的視点に立った施設運営・維持管理や弾力的・流動的スペースの確保等の施設マネジメント体制を一層強化するとともに、産業界・地方公共団体との連携強化、寄付・自己収入・長期借入金・PFI（民間資金等活用事業）の活用など、自助努力に基づいた新たな整備手法による施設整備を推進することが求められる。国は、国立大学法人等のこのような改革への取組を促進するために、必要な制度の見直しを行うとともに、国立大学法人等の取組を積極的に評価した上で、優先的な資源配分を行う。

2. 第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画

(平成18年4月18日 文部科学大臣決定)

平成18年3月28日に閣議決定された第3期科学技術基本計画（以下「第3期基本計画」という。）では、国立大学法人、大学共同利用機関法人、独立行政法人国立高等専門学校機構（以下「国立大学等」という。）の施設の整備について、国は「卓越した研究拠点、人材育成機能を重視した基盤的施設について、老朽施設の再生を最優先として整備する観点から、第3期基本計画期間中の5年間に緊急に整備すべき施設を盛り込んだ施設整備計画を策定し、計画的な整備を支援する」こととしている。

平成13年に策定した「国立大学等施設緊急整備5か年計画」（以下「前5か年計画」という。）において、優先的に取り組んできた狭隘解消整備等の実施により、教育研究環境が充実し、教育研究の進展、先端技術を取得した研究者の養成、新技術の開発などにおいて一定の効果が現れてきている。しかしながら、国立大学等施設の現状は、老朽化した施設が増加し、次世代をリードする研究者など優れた人材の養成や創造的・先端的な研究開発の場の確保が困難になりつつある。

国立大学等の施設は、世界一流の優れた人材の養成と創造的・先端的な研究開発を推進するための拠点であり、科学技術創造立国を目指す我が国にとって不可欠な基盤であることから、このような施設の状況を踏まえ、文部科学省では、第3期基本計画期間中における「第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画」（以下「本計画」という。）を策定し、国立大学等施設の重点的・計画的整備を支援する。

1. 計画期間

本計画の期間は、第3期基本計画期間（平成18年度から5年間）とする。

2. 基本方針

前5か年計画により、優先的に取り組んできた施設の狭隘解消は計画どおり整備されたものの、老朽施設の改善は計画の半分程度にとどまり、その後の経年による老朽改善需要とあいまって、老朽施設は増加した。また、平成13年度以降新たに設置された大学院への対応、若手研究者の教育研究活動への対応、新たな診断・診療方法の開発や医療人に対する研修・実習への対応など新たな教育研究ニーズも発生している。

このため、本計画においては老朽施設の再生を最重要課題とした上で、併せて、新たな教育研究ニーズによる施設の狭隘化の解消を図り、人材養成機能を重視した基盤的施設及び卓越した研究拠点（以下「教育研究基盤施設」という。）の再生を図る。

また、大学附属病院については、先端医療の先駆的役割などを果たすことができるよう、引き続き計画的に整備を図る。

(1) 人材養成機能を重視した基盤的施設

人々の知的活動・創造力が最大の資源である我が国にとっては、世界一流の優れた人材の養成が不可欠であり、そのための基盤となる施設の整備・充実が不可欠である。このため、国際的に通用する高度な人材養成機能の中核である大学院について、大学院教育の実質化等の教育内容・方法の改革・改善に伴うニーズに対応するとともに、各高等教育機関等に求められる多様で質の高い教育を実施するために、個性・特色ある教育内容・方法が展開できる教育環境の充実を図る。

また、優れた若手研究者等が、自立して研究できる環境の整備や生活面の環境整備を図る。

(2) 卓越した研究拠点

我が国が世界に貢献し、国際的な責任を果たしていくためには、卓越した研究拠点に国内外の優秀な研究者や学生を集め、世界水準の学術研究を推進していく必要があり、施設の整備はそれにふさわしい魅力ある研究環境を整える上で不可欠となっている。このため、優れた教育研究機能を持つ世界水準の独創的・先端的な学術研究の拠点を形成するための整備を図る。更に、国立大学等が地域の知の拠点として機能し、地方公共団体、民間企業との共同研究など社会等との連携協力を推進するとともに、国家的・社会的課題への対応などでプロジェクト的に実施される他大学や公的研究機関との共同研究等の連携協力を推進する研究環境の整備を図る。

(3) 大学附属病院

国立大学附属病院は、一般の医療機関と異なり、高度先進医療や医学系人材養成など卒前卒後の臨床教育の場であるとともに、先端医療の先駆的役割を果たす場であり、近年の医学の進歩に伴う医療の専門化、高度化への対応が不可欠である。また、地域における中核的医療機関としての機能も果たしており、災害時においては医療の拠点としての役割が求められることから、施設の耐震性等安全性の確保を図る必要性が極めて大きい。このため、一層社会貢献できる病院として再生するため、前5か年計画により進められた再開発整備に引き続き、着実に計画的な整備を図る。

3. 整備内容

国立大学等において必要な整備面積は平成17年度末において約1,000万㎡に達しており、このうち、各国立大学等における教育研究の活性化や現下の厳しい財政状況等を踏まえ、緊急に整備すべき対象を明確化し、重点的・計画的整備を図る観点から、次のような施設を整備の対象とする。

(1) 教育研究基盤施設の再生

教育研究基盤施設の再生に向け、老朽再生整備及び狭隘解消整備を行う。

併せて、安全・安心な教育研究環境を確保するため、「建築物の耐震改修の促進に関する法律」の一部改正を踏まえ耐震改修整備を図る。

①老朽再生整備（約400万㎡）

教育研究基盤施設の整備充実を図るため、老朽施設の再生に当たっては、教育研究上著しい支障がある施設に関し、次の要件を総合的に勘案しつつ整備を図る。

(i) 耐震性が著しく劣るものであること。

(ii) 基幹設備の不備など著しい機能上の問題を改善することにより、優れた教育研究成果が期待されるものであること。

②狭隘解消整備（約80万㎡）

新たに設置された大学院、若手研究者のスペース確保等、新たな教育研究ニーズへの対応については、既存施設の有効活用等によりスペースの確保を図ることを基本とし、このような施設マネジメントによる対応が困難で、真にやむを得ないものについては新增築による整備を図る。

(2) 大学附属病院の再生（約60万㎡）

大学附属病院は、先端医療の先駆的役割などを果たすため再開発整備を進めているところであり、引き続き、一層社会貢献することができるよう、着実に計画的な整備を図る。

(3) 上記(1)及び(2)の整備を行うための所要経費については、具体的な整備対象施設を特定せず、これまでの実績に基づき試算すると、現時点で最大約1兆2,000億円と推計される。

なお、現下の厳しい財政状況を踏まえ、国立大学等においては、これらを実施するための自助努力による新たな財源確保の可能性について積極的に検討するとともに、文部科学省においては、そのための支援を行い、事業の円滑な実施に最大限の努力を払うこととする。

4. 具体的実施方針

前5か年計画において、施設の効率的な利用や弾力的・流動的に使用可能なスペースの確保が図られた。このことから本計画の実施に当たっては、文部科学省による支援を基本としつつ、国立大学等が取り組む施設マネジメントや新たな整備手法による整備等のシステム改革を一層推進するため、以下の方針により行う。

(1) 国立大学等は、前5か年計画における成果も踏まえ、全学的視点に立った施設運営・維持管理やスペースの弾力的・流動的な活用等の施設マネジメントを一層推進する。また、前5か年計画において取り組んできた寄附・自己収入による整備など、国立大学等の自助努力に基づいた新たな整備手法による施設整備を引き続き推進するとともに、地域再生・都市再生を推進する等の観点から、産業界・地方公共団体との連携協力による施設整備を進める。なお、事業の実施に当たっては、国立大学等の公共性に鑑み、政府全体の公共工事コスト縮減対策を踏まえ、コスト縮減の取組や適正な執行を行う。

(2) 文部科学省は、(1)で述べたような、国立大学等における施設マネジメントや新たな整備手法による施設整備等の取組をさらに促進するために、必要な制度の見直しを行うとともに情報提供に努める。

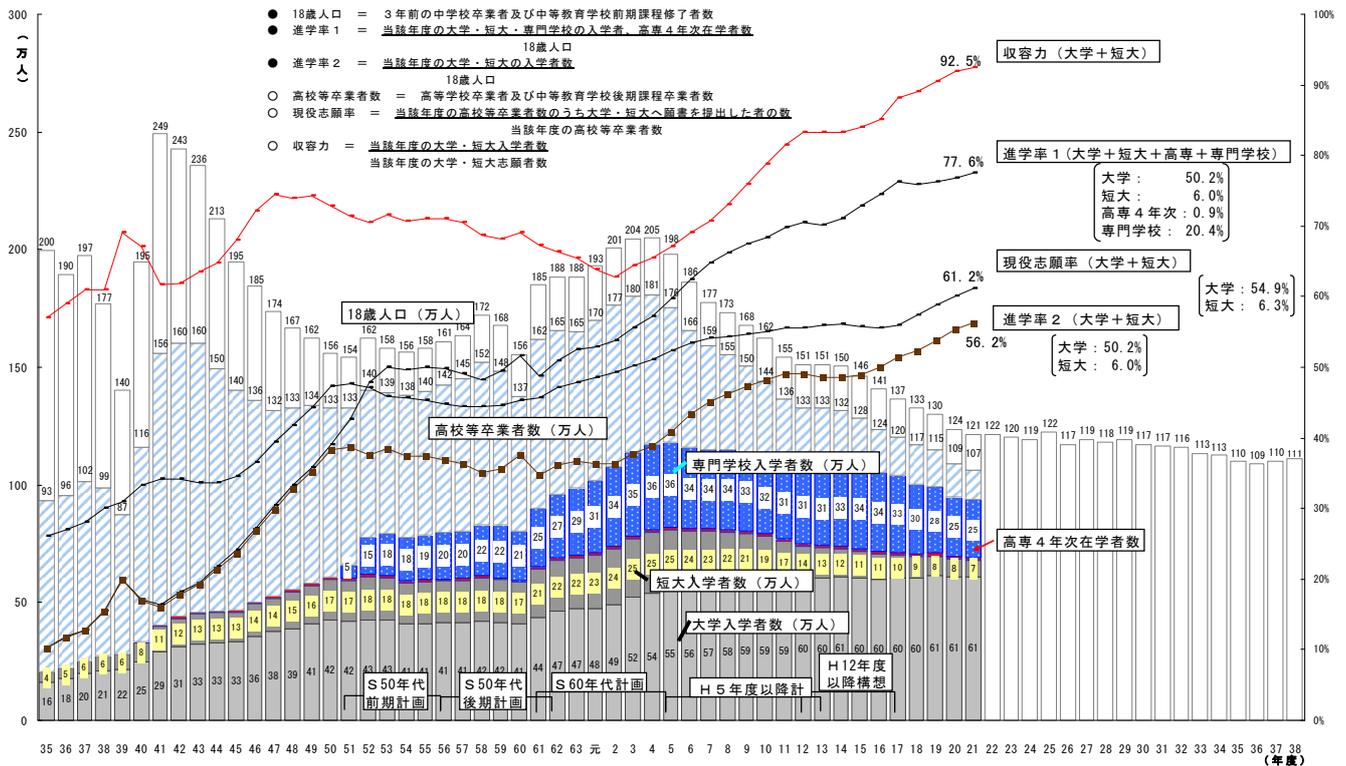
(3) 個々の施設整備に当たっては、国立大学等からの意見を聴取しつつ、当該施設の現況や利用状況の点検等を含む適切な調査・評価を行い、それらの結果に基づき実施事業を厳選する。その際、これらの国立大学等における施設マネジメントや新たな整備手法による整備などのシステム改革への取組等を積極的に評価する。

(4) 毎年度の予算編成に当たっては、政府全体として財政構造改革に取り組んでいかなければならない厳しい財政事情であることを踏まえ、施設整備に係る投資の効果を最大限発揮させることとして、必要な経費の確保を図っていくものとする。

3. 関連データ

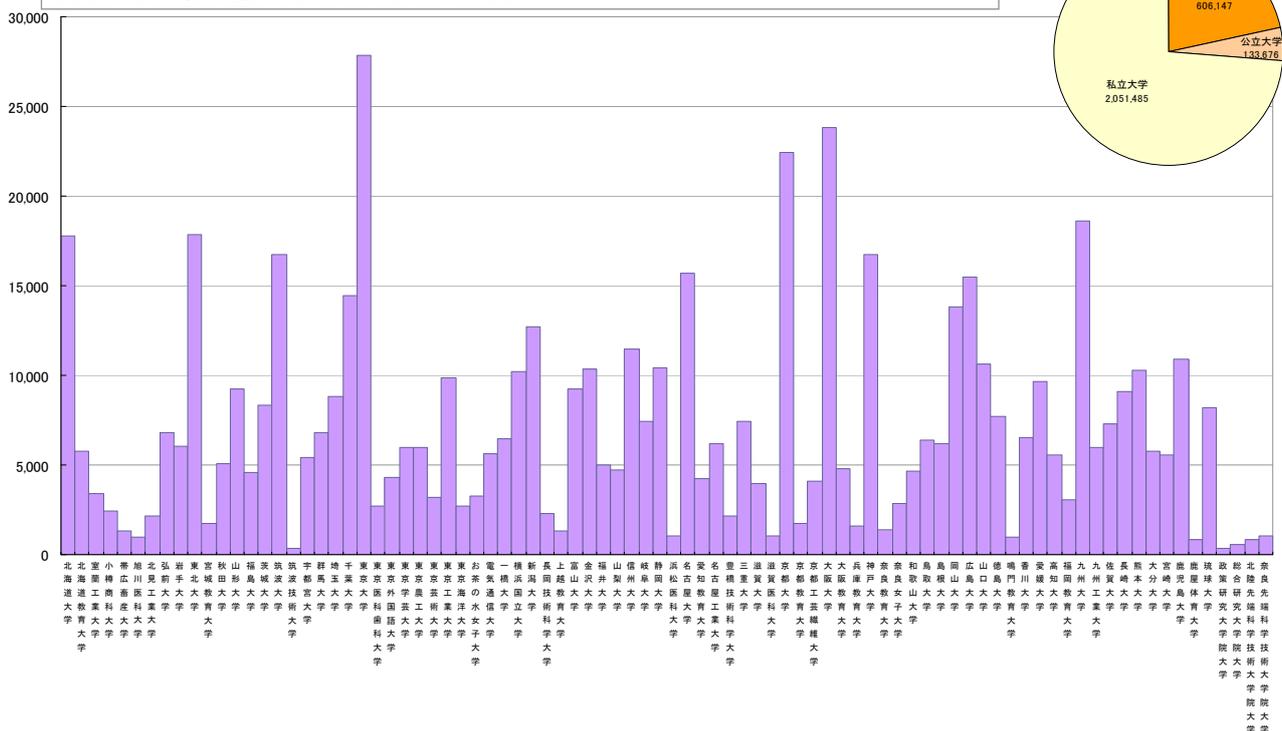
(1) 基本的データ

① 18歳人口、進学率等の推移



② 国立大学の学生数(大学別)

個々の国立大学法人の規模、特性、状況等は千差万別であり、国民が各法人に期待する役割等も同じではないことから、大学の機能別分化を進めるため、法人の特性を踏まえた一層の個性化が求められている。



出典1①: 文部科学省「学校基本調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より作成
 出典1②: 平成21年5月現在、文部科学省調べ

(2) 第2次5か年計画の進捗状況等

① 全体の進捗状況

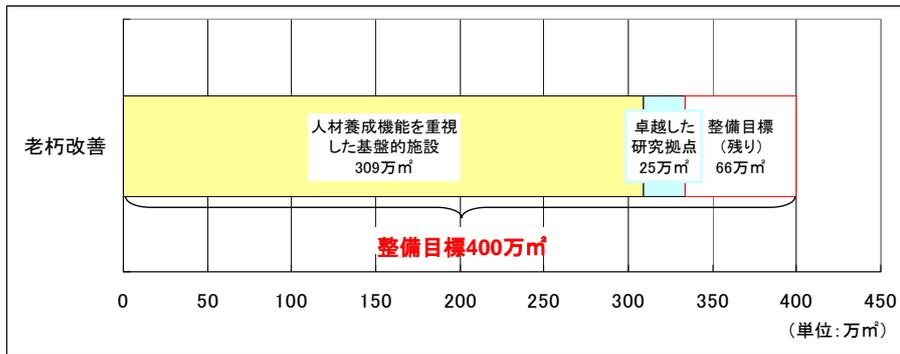
整備目標(540万㎡)の達成に向けて、全体として463万㎡(86%)と一定程度整備は進捗しているが、目標達成に向け残り77万㎡が未整備。

区分	整備面積				施設整備費
	老朽再生整備	狭隘解消整備	大学附属病院の再生	合計	
整備目標	400万㎡	80万㎡	60万㎡	540万㎡	1兆2,000億円
平成17年度補正	18.4万㎡	0.3万㎡	0.0万㎡	19万㎡	304億円
平成18年度当初	6.9万㎡	3.3万㎡	11.1万㎡	21万㎡	896億円
平成18年度補正	85.4万㎡	0.5万㎡	0.0万㎡	86万㎡	1,208億円
平成19年度当初	8.8万㎡	3.1万㎡	10.3万㎡	22万㎡	906億円
平成19年度補正	62.1万㎡	0.0万㎡	0.0万㎡	62万㎡	889億円
平成20年度当初	11.0万㎡	2.6万㎡	11.5万㎡	25万㎡	921億円
平成20年度補正(1次)	47.9万㎡	0.0万㎡	0.0万㎡	48万㎡	677億円
平成20年度補正(2次)	19.6万㎡	0.5万㎡	0.0万㎡	20万㎡	220億円
平成21年度当初	10.4万㎡	3.7万㎡	11.0万㎡	25万㎡	834億円
平成21年度補正	14.9万㎡	8.4万㎡	0.0万㎡	23万㎡	548億円
平成22年度当初	20.0万㎡	2.1万㎡	11.8万㎡	34万㎡	907億円
第1次5か年計画実績計上のPFI事業相当額	-	-	-	-	△321億円
小計	【76%】 305.4万㎡	【31%】 24.5万㎡	【93%】 55.7万㎡	【71%】 386万㎡	【67%】 7,989億円
《新たな整備手法による整備》					
平成18年度	2.0万㎡	7.2万㎡	0.3万㎡	10万㎡	251億円
平成19年度	7.6万㎡	9.4万㎡	0.4万㎡	17万㎡	498億円
平成20年度	4.4万㎡	11.3万㎡	3.1万㎡	19万㎡	462億円
平成21年度	14.4万㎡	14.9万㎡	2.9万㎡	32万㎡	684億円
小計	28.4万㎡	42.8万㎡	6.7万㎡	78万㎡	1,895億円
合計	【83%】 334万㎡	【84%】 67万㎡	【104%】 62万㎡	【86%】 463万㎡	【82%】 9,884億円

注1)合計欄の【】書は、整備目標に対する進捗率を示す。

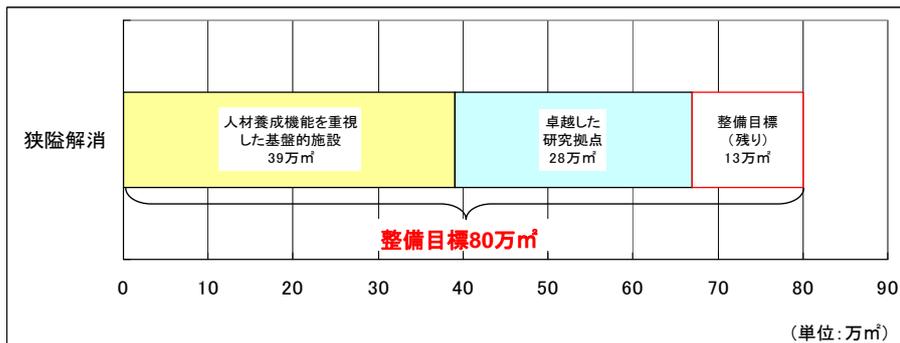
注2)施設整備費欄は、施設整備費補助金(不動産購入費を除く)、財政融資資金及び施設費交付金の合計額。

② 整備対象別にみた進捗状況(老朽再生整備)



※教育研究基盤施設の老朽再生整備について、整備内容ごとに内訳を集計(22年度当初まで)

③ 整備対象別にみた進捗状況(狭隘解消整備)

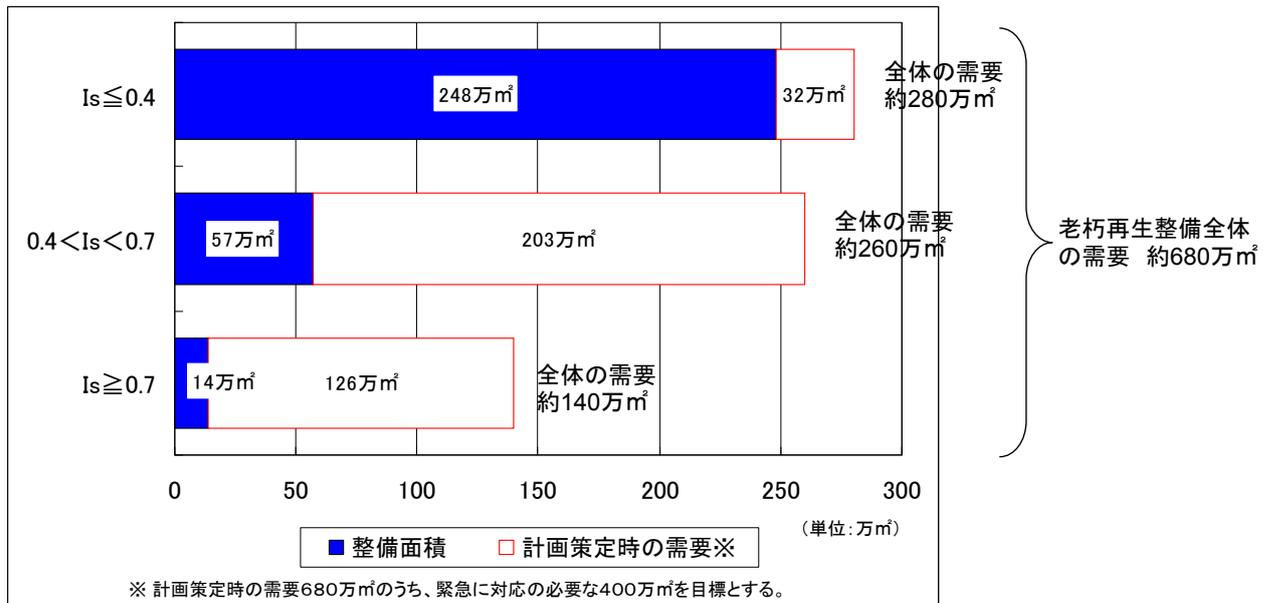


※教育研究基盤施設の狭隘解消整備について、整備内容ごとに内訳を集計(22年度当初まで)

(2) 第2次5か年計画の進捗状況等

④ 耐震性能別にみた老朽再生整備の進捗状況

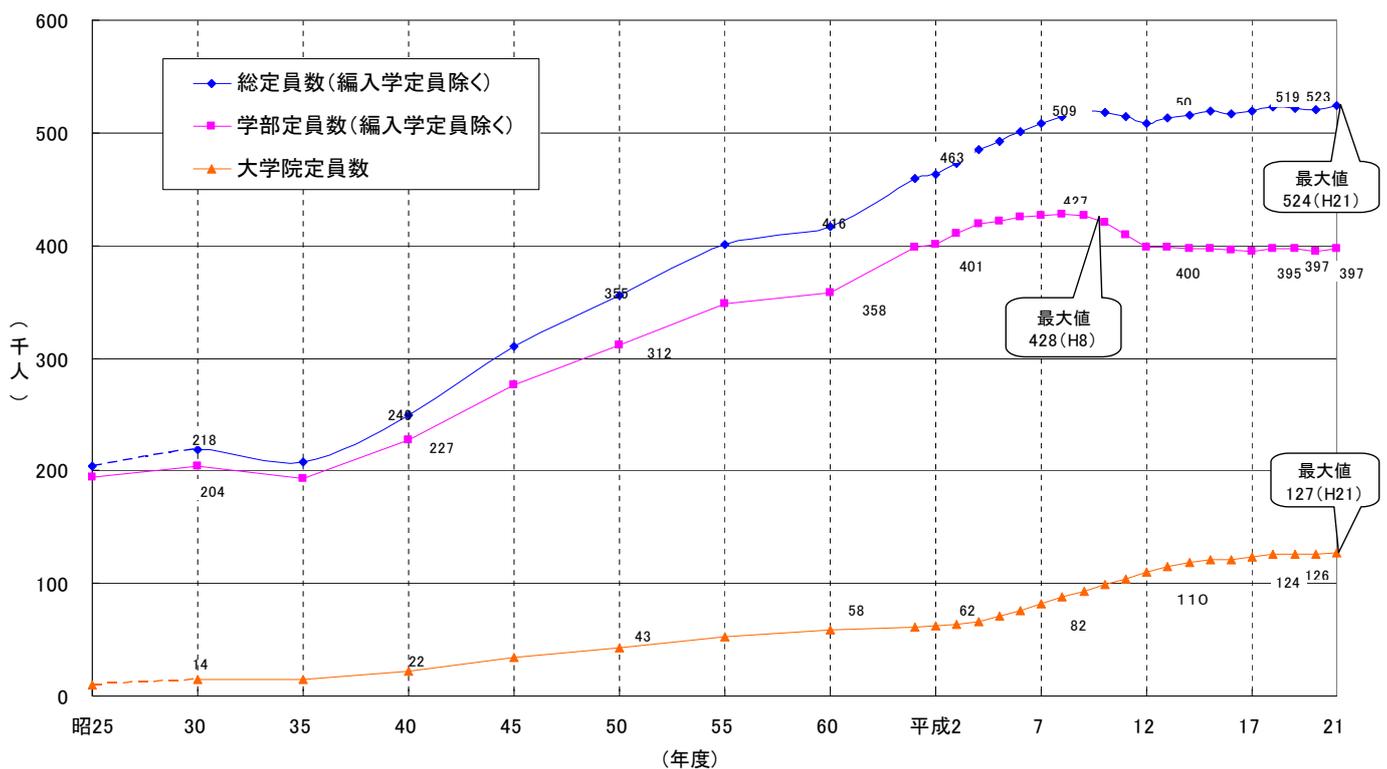
(平成17年度補正～平成22年度当初)



※第2次5か年計画策定時に必要とされた整備需要に対する進捗状況を示しており、計画策定後の新たな需要は反映していない(赤く囲った部分は残りの面積を示す)。
 ※このうち、 I_s 値0.4以下の施設については、「1995年兵庫県南部地震を経験した学校建築の内、第二次診断における I_s 値が0.4以下の建物の多くは倒壊又は大破した」(財団法人日本建築防災協会)ことから、平成18年3月に本協力者会議がまとめた報告書において、最重要課題として緊急に取り組む必要性が指摘され、第2次5か年計画においても、整備需要280万㎡全体の耐震性の確保を目指している。

(3) 国立大学法人における学生定員と必要面積等の推移

① 国立大学法人における学生定員の推移



(4) 耐震化の推進

① 現在までに評価を公表された「地震発生可能性の長期評価」



出典 4① 地震調査研究推進本部地震調査委員会作成

② 建築物の耐震改修の促進

建築物の耐震改修の促進に関する法律の一部を改正する法律 (平成17年11月7日公布)

近年、新潟県中越地震、福岡県西方沖地震など大規模地震が頻発
どこで地震が発生してもおかしくない状況

東海地震、東南海・南海地震、首都直下地震等の発生が切迫
いつ地震が発生してもおかしくない状況

中央防災会議「地震防災戦略」
東海・東南海・南海地震の
死者数等を10年後に半減

地震防災推進会議の提言
住宅及び特定建築物※の
耐震化率の目標 約75%→9割

※特定建築物: 一定規模以上の多数利用の建築物 (学校、病院、百貨店など)

(耐震改修促進法の改正のポイント)

計画的な耐震化の推進

○国は基本方針を作成し、地方公共団体は耐震改修促進計画を作成

建築物に対する指導等の強化

- 道路を閉塞させる住宅等に指導、助言を実施
- 地方公共団体による指示等の対象に学校、老人ホーム等を追加 (現行の指示等は、百貨店、劇場など不特定多数利用の建築物が対象)
- 地方公共団体の指示に従わない特定建築物を公表
- 倒壊の危険性の高い特定建築物については建築基準法により改修を命令

支援措置の拡充

- 耐震改修計画の認定対象※に一定の改築を伴う耐震改修工事等を追加
- 耐震改修支援センターによる耐震改修に係る情報提供等

※耐震改修計画の認定により、耐震関係規定以外の不適格事項が適用されないという、建築基準法上の特例が受けられる。

建築物の耐震診断及び耐震改修の促進を図るための基本的な方針 (平成18年1月国土交通省告示第184号)

- 1 基本的な事項
- 2 耐震化の目標(住宅・特定建築物)
○現状の75パーセントを、平成27年までに少なくとも9割にすることを目標。
※特定建築物: 一定規模以上の多数利用の建築物 (学校、病院、百貨店等) 大学は3階以上・1,000㎡
- 3 技術上の指針
- 4 啓発及び知識の普及
- 5 都道府県耐震改修促進計画の内容

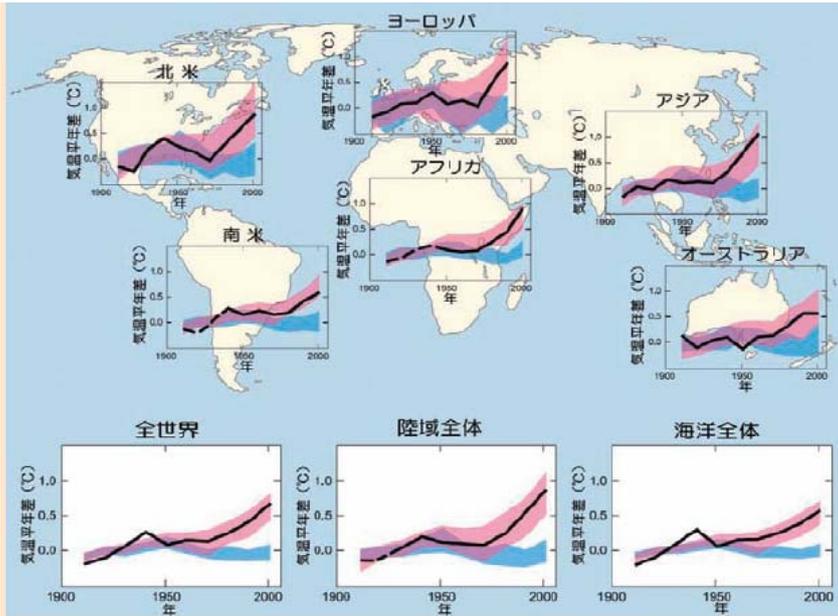
(都道府県は遅くとも1年以内を目途に策定)

《主な内容》

- ・耐震化の目標
- ・公共建築物について速やかな耐震診断、結果の公表、整備プログラム策定等
- ・耐震診断・改修の促進を図るための施策
- ・避難者等の通行を確保すべき道路
- ・建築物の所有者に対する指導等の考え方
- ・地震防災マップ、相談体制の整備等
- ・都道府県内の市町村耐震改修促進計画の策定

(5) 地球環境問題への対応

① 世界規模及び大陸規模の気温変化



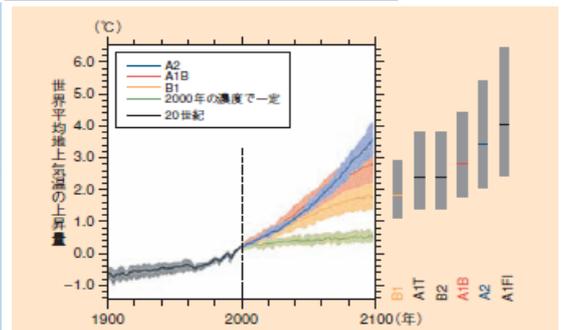
注1：
 ■：自然起源のみの放射強制力を用いたモデル
 ■：自然起源及び人為起源の放射強制力を用いたモデル
 —：観測結果（破線は観測面積が全体の50%未満）

注2：1906年～2005年の地上気温（10年平均値）の変化（1901年～1950年の平均値が基準）とモデルシミュレーションの比較である。

注3：放射強制力とは、地球-大気システムに入力するエネルギーのバランスを変化させる際、ある因子が持つ影響力の尺度であり、気候を変化させる潜在的な力の大きさを示す。温室効果ガス濃度によって生じる放射強制力は、正の力を持ち、地表を暖める傾向がある。

出典：IPCC第4次評価報告書

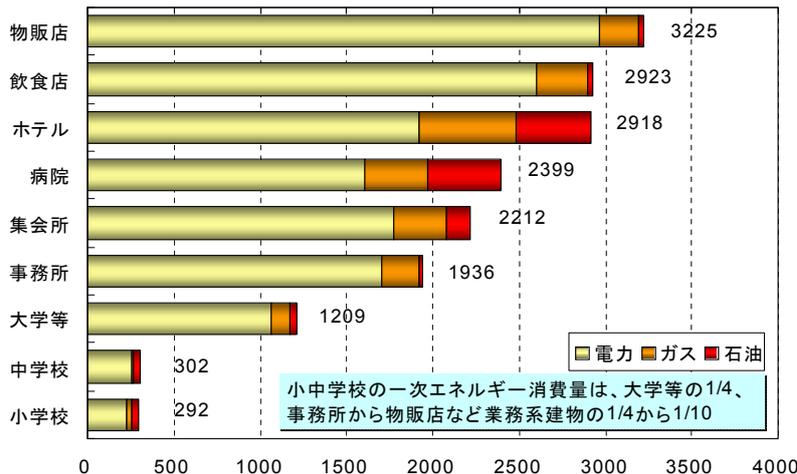
② 今後の気温上昇の予測



注
 ○A1 高成長社会シナリオ
 ・高度経済成長が続き、人口が21世紀半ばにピークに達した後減少し、新技術や高効率化技術が導入される。
 A1FI 化石エネルギー源を重視
 A1T 非化石エネルギー源を重視
 A1B 各エネルギー源のバランスを重視
 ○A2 多元化社会シナリオ
 ・世界の人口は増加を続ける。
 ・地域経済発展が中心で、1人当たりの経済成長や技術変化は他の筋書きに比べバラバラで緩やかである。
 ○B1 持続発展型社会シナリオ
 ・地域間格差が縮小した世界。
 ・環境の保全と、経済の発展を地球規模で両立する。
 ○B2 地域共存型社会シナリオ
 ・経済、社会及び環境の持続可能性を確保するための地域的対策に重点が置かれている世界。
 ・環境問題等は、各地域で解決が図られる。
 出典：IPCC第4次評価報告書

(6) 学校施設のエネルギー消費の実態等

① 建築用途別のエネルギー消費原単位



小中学校の一次エネルギー消費量は、大学等の1/4、事務所から物販店など業務系建物の1/4から1/10

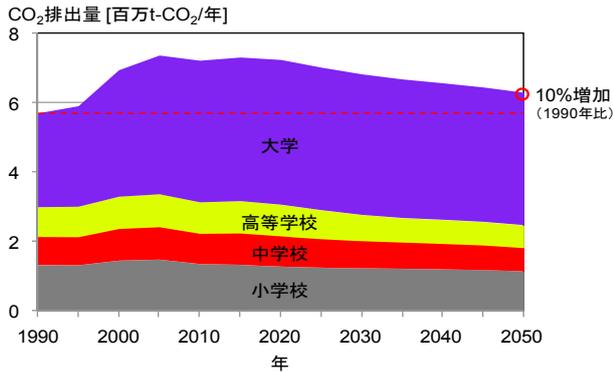
床面積あたり一次エネルギー消費量(MJ/年・㎡)

用途	電力	ガス	石油	合計	資料数	年度
物販店	2967	226	32	3225	20	2003年度
飲食店	2601	292	29	2923	28	2003年度
ホテル	1926	554	438	2918	50	2003年度
病院	1607	360	432	2399	45	2003年度
集会所	1770	310	133	2212	188	2003年度
事務所	1704	213	19	1936	558	2003年度
大学等	1064	109	36	1209	28	2003年度
中学校	254	15	33	302	211	2006年度
小学校	223	33	36	292	514	2006年度

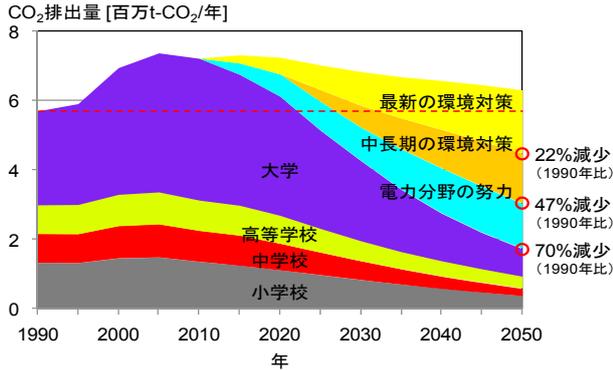
エネルギー消費原単位：
 エネルギー使用量を、「生産数量又は建物床面積その他エネルギー使用量と密接な関係を持つ値」で除したもの（この表では、建物床面積で算出）
1次エネルギー：
 建物で使用する電力・ガス・石油等のエネルギーを、天然ガス・石油等の一次化石燃料レベルでのエネルギーに換算したもの。

② CO₂排出総量のマクロ推計

【現状維持のケース】



【最大限に努力したケース】



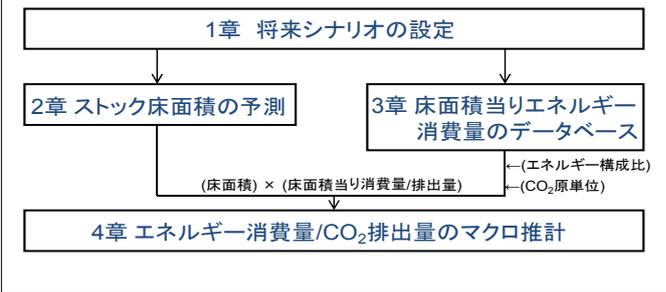
■ 「現状維持のケース」、「最大限に努力したケース」において、学校施設の運用時のCO₂排出量の推計を行った。

■ ここで言う「最大限に努力したケース」とは、「最新の環境対策による削減量」、「中長期的な環境対策による削減量」、「電力分野の努力による削減量」を差し引いたものである。

■ 推計には、ストック床面積の推計結果に、床面積当りエネルギー消費量の統計値及び質的变化・多目的化や環境対策による床面積当りエネルギー消費量の変化率を用いた。

■ 最新の環境対策や中長期的な環境対策の実施といった「学校側の努力」と「電力側の努力」の双方の努力により、大幅なCO₂排出量削減の可能性が示された。

【マクロ推計のフレームワーク】



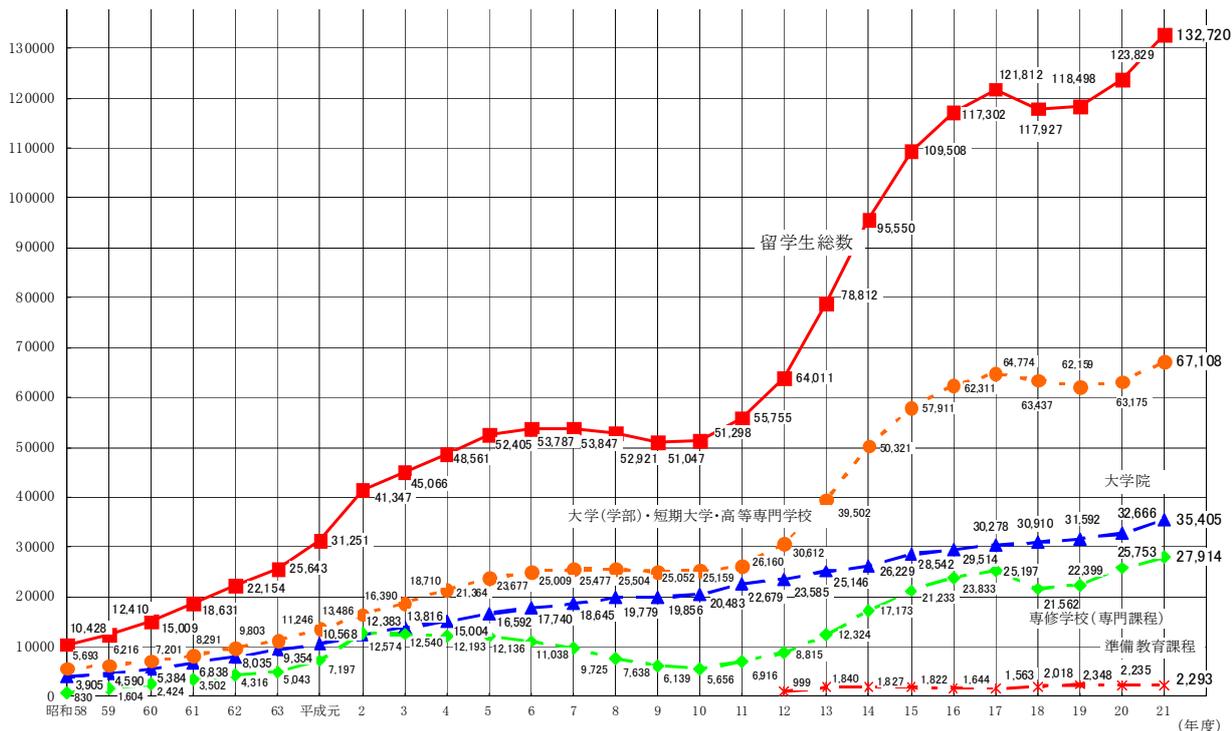
出典① 国立教育政策研究所 文教施設研究センター調べ (2006年度値) 及び日本ビルエネルギー総合技術管理協会調査結果 (2003年度値) により
学校施設整備指針策定に関する調査研究協力者会議「環境を考慮した学校づくり検討部会」の伊香賀委員作成

出典② 上記「環境を考慮した学校づくり検討部会」の伊香賀委員作成

(7) 高等教育の国際化

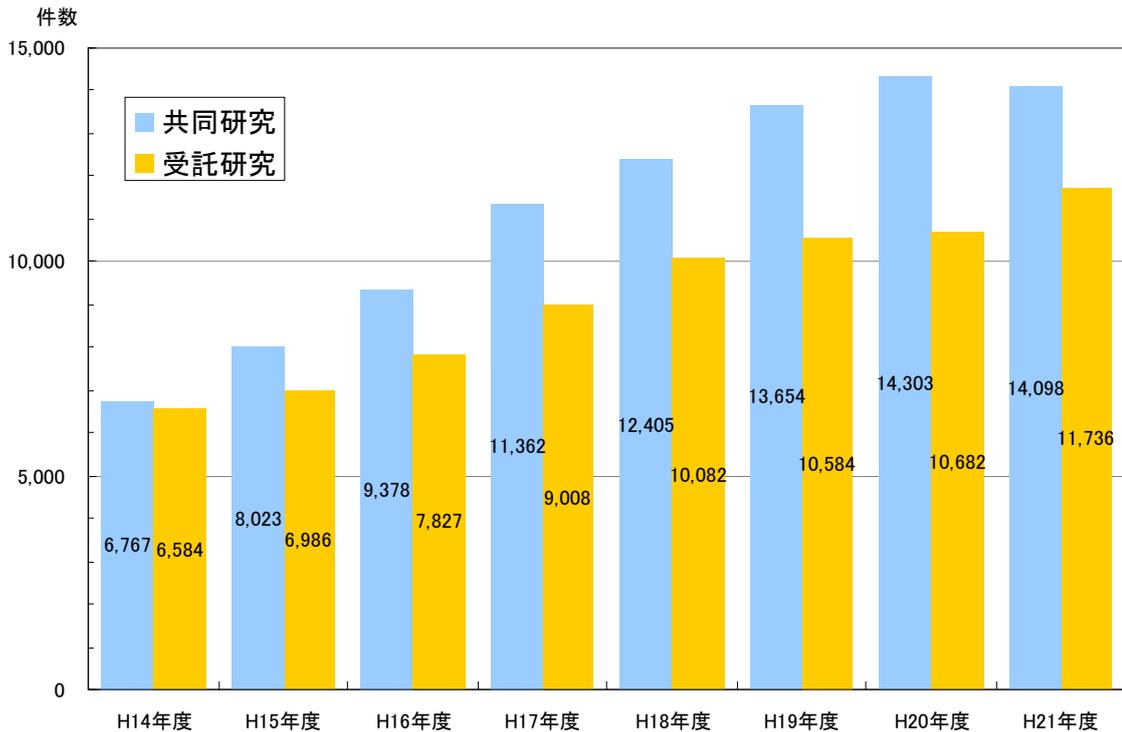
① 我が国の高等教育機関に在籍する外国人留学生数の推移

(各年5月1日現在)



(8) 産学連携の推進

国立大学法人等の共同研究、受託研究の実施件数



(9) 地域活性化への貢献

1大学当たり **生産誘発効果** ⇒ **400億円 ~ 700億円**
雇用創出数 ⇒ **6,000人 ~ 9,000人**
 大学の教育研究の継続性から、その**経済波及効果は持続的かつ安定的**に生じる

【事例】地方国立大学の経済効果

	生産誘発額	雇用創出数	税収効果 (上段: 県税) (下段: 県内市町村税)
東北地方 中規模総合大学	407億円	6,783人	4.2億円 3.1億円
関東地方 中規模総合大学	597億円	9,114人	5.2億円 4.3億円
近畿地方 中規模総合大学	428億円	6,895人	3.7億円 3.0億円
中国地方 中規模総合大学	667億円	9,007人	5.6億円 5.0億円

〈参考〉大学以外の経済効果

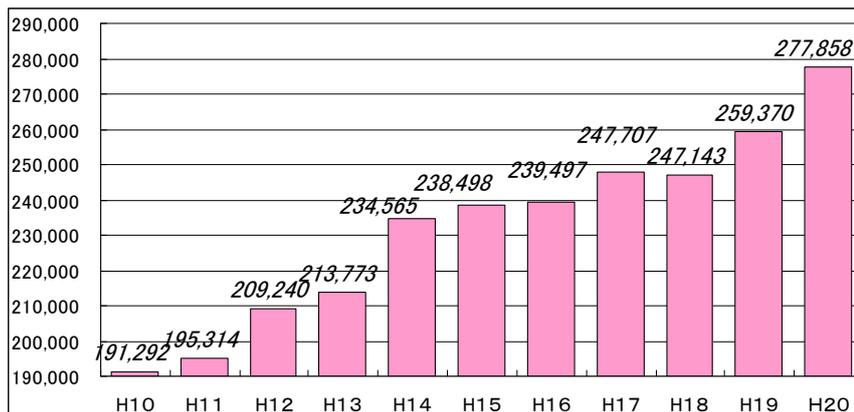
県域内への効果	生産誘発額	雇用創出数
九州新幹線 開業による効果	166億円	-
東北地方 プロ野球チーム	97億円	876人
九州地方 J1リーグ・サッカー チーム	24億円	-

【効果の大きい産業の例】

商業 [卸売や小売店]、不動産 [住宅賃貸、仲介業など]、化学製品 [製薬メーカーなど]、対個人サービス [飲食店、ホテル、娯楽サービスなど]、食料品 [食品や酒類の製造など]、運輸 [バス、タクシー、トラック運送、鉄道など]

(10) 医療の高度化や地域医療の機能強化

① 国立大学附属病院の手術件数（H10～20）

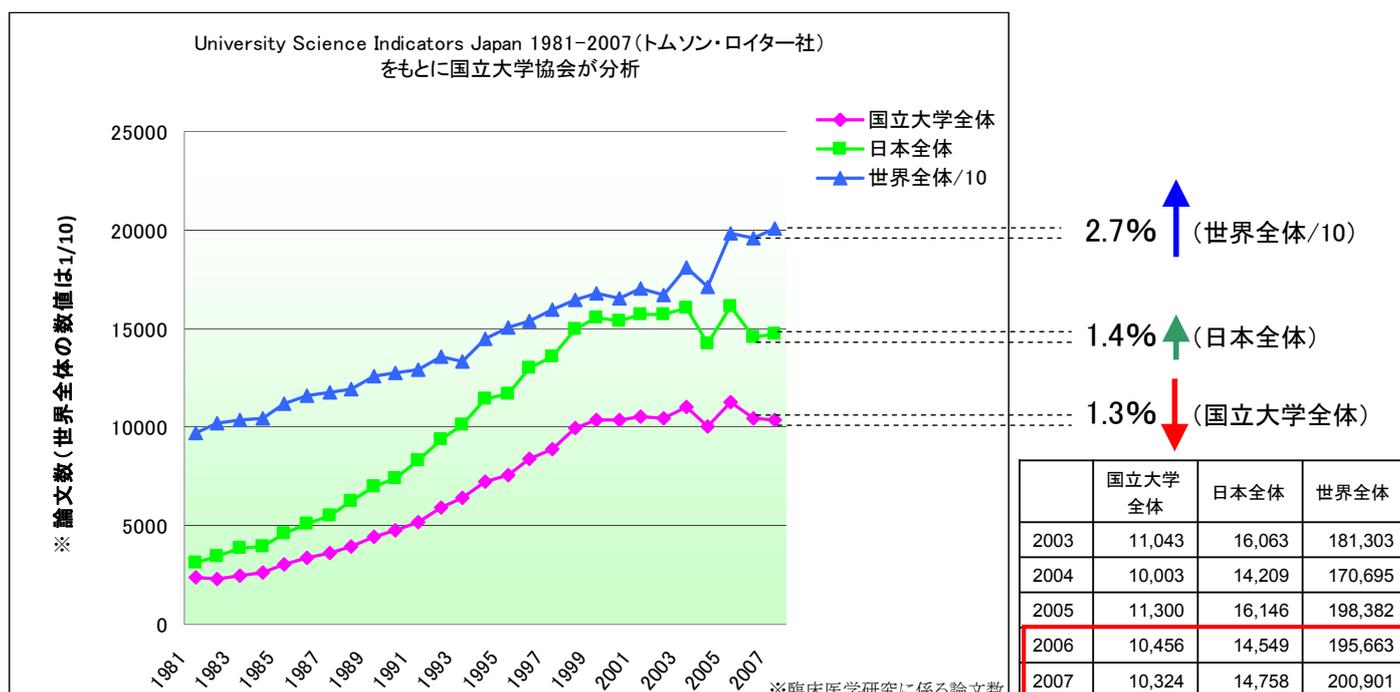


② 国立大学附属病院における分娩数・救急搬送件数の増加



③ 臨床医学研究の国際競争力(臨床医学論文数の推移)

06年～07年にかけて世界全体の論文数が2.7%増えたにもかかわらず、日本全体では1.4%の微増。さらに、国立大学全体では1.3%低下。これは我が国における臨床医学研究に係る国際競争力が低下していることを示している。



出典 10① 文部科学省作成
出典 10② 国立大学附属病院長会議調べ
出典 10③ 国立大学協会作成資料

4. 国立大学法人等施設整備を進めるにあたり配慮が必要な主な答申・報告等

【国立大学法人等の施設整備全般】

- ・ 独創性・多様性に立脚した基礎研究の強化
 - 新しい芽となる研究を不断に生み出していくためには、研究者の自発的発想に基づく多様で重厚かつ独創的な知の創造を目指した研究を推進するとともに、それらを飛躍的に発展させていくことが重要である。また、多様な知識の出会いや衝突により新奇を創出していくには、研究領域、研究組織、国境といった既存枠組みを超え、現象の法則性等を学問領域間で共有するなど、知を横断的に捉えて新たな切り口でアプローチする研究が重要である。
 - このため、研究者の意欲を高め、新たな挑戦を促し、また全体的な質の向上を図るための改革を推進していく。
 - ・ 研究者が自らの発想に基づいて行う研究を支援するとともに、学問的な多様性・継続性を確保し発想の苗床を確保していくための、大学の基盤的経費の充実を図る。
- ・ 国際水準の研究環境の形成
 - 科学・技術の強化のためには、研究開発及び人財育成の基盤となる大学及び研究開発機関の施設・設備の整備・高度化の促進及び安定的な運用確保が不可欠である。
 - このため、大学の施設・設備の安定的で効果的な整備、活用を図る。
 - ・ 国立大学法人（大学共同利用機関法人及び国立高等専門学校を含む。）において重点的に整備すべき施設等に関する国立大学法人全体の施設整備の計画を国が策定し、安定的・継続的な整備が可能となるよう支援の充実を図る。その際、安全な教育研究環境の確保、環境対策に留意しつつ、イノベーションの創出や高度な人財育成に資するキャンパス環境、若手研究者や外国人研究者・留学生を惹きつける国際水準の教育研究環境の形成を目指す。
 - ・ 各国立大学法人は、長期的視野でのキャンパス全体の整備計画を策定し、経営的視点で施設マネジメントを一層推進することが期待される。また、寄附や自己収入、長期借入金、PFI（民間資金等活用事業）など、多様な財源を活用した施設整備が期待されており、税制上の優遇措置の在り方の検討も含め、これを支援する取組を進める。

（「科学技術基本政策策定の基本方針」

平成22年6月16日総合科学技術会議基本政策専門調査会）

【大学を支える基盤的経費への支援】

- ・ 国は、大学における教育研究の多様性と持続性を確保する観点から、大学の教育研究活動に係る基盤的経費である国立大学法人運営費交付金及び施設整備費補助金、私学助成を拡充する。
- ・ 大学は、自らのマネジメント力の向上に努め、外部資金等を柔軟に活用して、教育研究施設・設備の充実、教育研究活動に係る推進体制の整備、公的研究費等の管理・監査のための事務局体制の強化等を推進することが期待される。

（「我が国の中長期を展望した科学技術の総合戦略に向けて」

平成21年12月25日科学技術・学術審議会基本計画特別委員会）

- ・大学の基盤的経費は、各大学において、教職員の人件費、教育研究の高度化に対応する施設・設備や、経済的に困難な学生への授業料減免等のために措置されている。これらの国による支援は、大学の教育研究の特性を踏まえ、教員の自由な発想に基づく研究活動や、それに基づく高度な教育を、自律的な大学運営の下で、継続的・安定的に行うために不可欠である。
- ・平成16年度以降、国立大学法人運営費交付金が、毎年度減額（平成22年度までに830億円の削減）となっており、施設整備費も平成16年度以降、それ以前と比べて低い水準で推移している。
- ・このような状況において、教員の研究に携わる時間の減少、教育研究に必要な設備や大学附属病院等の施設設備の更新の遅れ、図書館等資料費の減少等、大学の日常的な教育研究活動や学生支援に与える影響が懸念される。
- ・現下の厳しい財政状況であっても、大学が、こうした役割・機能を十分に担えるよう、継続的・安定的な教育研究活動を維持・発展させるために必要な基盤的経費の確保が求められる。

（「中期的な大学教育の在り方に関する第四次報告」
平成22年6月29日中央教育審議会大学分科会）

- ・平成22年度中には「第2次国立大学等施設緊急整備5ヵ年計画」の整備目標の8割を達成する見込みであるが、平成21年度末において、改修を要する施設が保有面積の約3割程度存在するなど、施設整備費は需要に比べ、絶対的に不足している状況である。

各種意見聴取においては、法人化後、学生宿舎等の施設についても、長期借入れや外部資金の活用など、自助努力による整備が進んでいるとの意見がある一方、施設整備費補助金の絶対額が不足しており、老朽化対策が十分に講じられていないなどの課題が指摘されている。また、日常の維持・修繕のための経費が十分でないとの指摘もある。

なお、独立行政法人国立大学財務・経営センターの施設費交付事業、施設費貸付事業については、国立大学法人の施設の老朽化が進む中、多様な財源を確保する上で欠かすことのできないものであり、これらを廃止した場合は、各法人において、施設整備財源の減少、借入れ金利の上昇等、今以上の負担増につながるものが懸念される。そのため、これら事業の今後の取扱いについては、円滑な施設整備に支障をきたさないよう、慎重な検討が必要である。

- ・施設整備費については、各国立大学法人の計画的な施設整備や新たな政策課題への対応が進められるよう、施設整備費補助金の必要な所要額の確保に努める。

（「-国立大学法人の在り方に係る検証- 国立大学法人化後の現状と課題について（中間まとめ）」
平成22年7月15日文科科学省）

【教育機能の発展～優れた人材の育成など】

- ・「知」の創造・継承・発展に貢献できる人材を育成する。こうした観点から、国際的競争力を持ち、世界の英知が結集する教育研究拠点を重点的に形成するとともに、大学の教育研究の高度化を促す。
- ・優れた人材の育成や創造的・先端的な研究開発を推進するため、大学等の施設・設備について、安全性の確保だけでなく、現代の教育研究ニーズを満たす機能を備えるよう、重点的・計画的な整備を支援する。

（「教育振興基本計画」平成20年7月1日閣議決定）

- ・教育環境の面では、少人数指導の推進（教員一人当たり学生数の比率の維持向上等）、支援スタッフや情報通信技術等の活用、豊かな課外活動や自習を可能とする施設・設備の整備など、双方向性を確保した教育システムが欠かせない。
- ・少人数指導の推進や情報通信技術の活用などに必要な施設・設備の整備を含め、教育方法の改善に向けた優れた実践を支援する。

（「学士課程教育の構築に向けて」平成20年12月24日中央教育審議会答申）

- ・人材養成の観点からの大学の機能は、大学院では①研究者養成、②高度専門職業人養成に整理される。学士課程においては、①企業等で幅広く活躍する職業人の養成、②科学的・専門的知識を有する技術者の養成、③業務独占資格等を有する専門職の養成、④芸術・体育等特定分野の専門家の養成、⑤特定の職業を念頭に置かない職業・社会への準備教育等に分けられ、（中略）、大学・学部等ごとに重点を置く機能を明確化し、職業教育の充実を図ることが重要である。
- ・高等専門学校に期待されている人材養成機能に即した専攻科の整備・充実を進め、その一層の高度化についても検討する必要がある。

（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について－第二次審議経過報告－」平成22年5月17日中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会）

- ・我が国の成長を牽引する世界的な大学院教育拠点の形成
21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムの実績に基づき、国際的なリーダーとして活躍できる人材を養成し、我が国の発展と成長を牽引する世界的な大学院教育拠点の形成を推進する。

（主な検討事項）

- ・国内外の様々な分野で活躍し、指導的役割を果たす、高度の専門性と深い教養（倫理観、世界観、歴史観、感性等を含む）に裏付けられた知的リーダーシップを有する人材を養成。そのための世界的な大学院教育拠点の形成を支援する。
- ・海外との双方向の交流を重視した質の高い大学間交流プログラムを推進し、大学の国際的な展開力を強化する。

（「中期的な大学教育の在り方に関する第四次報告」平成22年6月29日中央教育審議会大学分科会）

- ・高等教育においては、奨学金制度の充実、大学の質の保証や国際化、大学院教育の充実・強化、学生の起業力の育成を含めた職業教育の推進など、進学機会拡大と高等教育の充実のための取組を進め、未来に挑戦する心を持って国際的に活躍できる人材を育成する。さらに、教育に対する需要を作り出し、これを成長分野としていくため、外国人学生の積極的受入れとともに、民間の教育サービスの健全な発展を図る。
- ・「リーディング大学院」構想等による国際競争力強化と人材育成
我が国が強みを持つ学問分野を結集したリーディング大学院を構築し、成長分野などで世界を牽引するリーダーとなる博士人材を国際ネットワークの中で養成する。

（「新成長戦略～元気な日本復活のシナリオ～」平成22年6月18日閣議決定）

【研究機能の発展～イノベーションの創出など】

（基礎科学力強化）

- ・研究者の自由な発想に基づく研究は、我が国の将来にわたる持続的な成長・発展や、人類の存続に係る諸課題の解決を図る上で不可欠な「基礎科学力」を支える極めて重要なものであり、一層重視した上で広範かつ持続的に推進していくことが必要である。

その一方で、近年、これらの研究の中心である大学等（大学及び大学共同利用機関をいう。）の基盤的経費が減少傾向にあること、（中略）一層の充実・強化に向けた取組を着実に進めていくことが不可欠である。

（「我が国の中長期を展望した科学技術の総合戦略に向けて」

平成21年12月25日科学技術・学術審議会基本計画特別委員会）

（イノベーションの創出・加速）

- ・国全体の学術研究の発展の観点からは、大学の枠を越えて研究者の知を結集させる共同利用・共同研究の拠点（国際的な拠点を含む）を支援していくことが特に重要である。

（「学術研究の推進体制に関する審議のまとめ」

平成20年5月27日科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会）

- ・革新的技術を持続的に生み出す環境整備

世界最先端の研究施設・拠点に優れた外国人を受け入れるための魅力ある研究・生活環境を整備する

（「革新的技術戦略」平成20年5月19日総合科学技術会議）

- ・我が国は、今改めて、優れた人材を育成し、研究環境改善と産業化推進の取組を一体として進めることにより、イノベーションとソフトパワーを持続的に生み出し、成長の源となる新たな技術及び産業のフロンティアを開拓していかなければならない。
- ・2020年までに、世界をリードするグリーン・イノベーション（環境エネルギー分野革新）やライフ・イノベーション（医療・介護分野革新）等を推進し、独自の分野で世界トップに立つ大学・研究機関の数を増やす。
- ・新しい知の創造とイノベーション創出を両輪として制度改革や基盤整備に果敢に取り組むとともに、科学・技術人材の育成を進め、彼らが活躍する道を社会に広げていく。
- ・拠点形成と集中投資により、我が国の研究開発・人材育成における国際競争力を強化する最先端研究施設・設備や支援体制等の環境整備により国内外から優秀な研究者を引き付けて国際頭脳循環の核となる研究拠点や、つくばナノテクアリーナ等世界的な産学官集中連携拠点を形成する。
- ・特定分野で世界トップ50に入る研究・教育拠点を100以上構築し、イノベーション創出環境を整備する

（「新成長戦略～元気な日本復活のシナリオ～」平成22年6月18日閣議決定）

（若手研究者のための環境整備）

- ・大学・公的研究機関改革を加速して、若者が希望を持って科学の道を選べるように、自立的研究環境と多様なキャリアパスを整備し、また、研究資金、研究支援体制、生活条件などを含め、世界中から優れた研究者を惹きつける魅力的な環境を用意する。

（「新成長戦略～元気な日本復活のシナリオ～」平成22年6月18日閣議決定）

【産学官連携の強化】

- ・各大学等においては、産学官連携活動についても、教育・研究と新たな社会価値の創造の三要素についてバランスの取れた一体化を図る視点に立ち、それぞれが定める使命に即して、主体的かつ多様な取組を、戦略的に展開することが望ましい。

・事業化支援機能の強化

大学発ベンチャー創出のためには、ベンチャー創出の核となる技術を中心として継続的に技術開発を行っていくことに加えて、(中略) インキュベーション施設の確保を含む各種支援機能の充実を図ることが不可欠である。

(「イノベーションの創出に向けた産学官連携の戦略的な展開に向けて」)

平成19年8月31日科学技術・学術審議会 技術・研究基盤部会 産学官連携推進委員会)

【地域連携・社会貢献】

- ・大学は教育と研究を本来的な使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献(地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与)の重要性が強調されるようになってきている。当然のことながら、教育や研究それ自体が長期的観点からの社会貢献であるが、近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる。

(「高等教育の将来像」平成17年1月28日中央教育審議会答申)

【国際化の推進】

- ・日本をより世界に開かれた国とし、アジア、世界との間のヒト、モノ、カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に留学生受入れ30万人を目指す。その際、高度人材受入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得していく。

・受入れ環境づくり～安心して勉学に専念できる環境への取組～

宿舍確保の取組など留学生が安心して勉学に専念できる受入れ環境づくりを推進する。大学等が各関係機関と連携し、短期留学を含め渡日後1年以内の留学生に宿舍を提供できるよう、大学の宿舍整備、(中略)等の多様な方策を推進。

(「留学生30万人計画骨子」平成20年7月29日)

文部科学省、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省)

- ・外国人学生の受入れ拡大、研究者や専門性を必要とする職種の海外人材が働きやすい国内体制の整備を行う。
- ・アジアや世界との大学、科学・技術、文化、スポーツ、青少年等の交流・協力を促進しつつ、国際的に活躍できる人材の育成を進める。
- ・我が国の教育機関・企業を、積極的に海外との交流を求め、又は国内のグローバル化に対応する人材を生み出す場とするため、外国語教育や外国人学生・日本人学生の垣根を越えた協働教育をはじめとする高等教育の国際化を支援するほか、外国大学との単位相互認定の拡大や、外国人教職員・外国人学生の戦略的受入れの促進、外国人学生の日系企業への就職支援等を進める。

(「新成長戦略～元気な日本復活のシナリオ～」平成22年6月18日閣議決定)

【地球環境問題への貢献～地球温暖化対策・低炭素社会の構築】

- ・すべての主要国による公平かつ実効性ある国際的枠組みの構築や意欲的な目標の合意を前提として、2020年に、温室効果ガスを1990年比で25%削減するとの目標を掲げ、あらゆる政策を総動員した「チャレンジ25」の取組を推進する。
- ・エコ住宅の普及、再生可能エネルギーの利用拡大や、ヒートポンプの普及拡大、LEDや有機ELなどの次世代照明の100%化の実現などにより、住宅・オフィス等のゼロエミッション化を推進する。

（「新成長戦略～元気な日本復活のシナリオ～」平成22年6月18日閣議決定）

【キャンパス環境の充実～学生支援の視点】

- ・従来、大学の在り方に関する議論では、教育と研究が着目されてきた。しかしながら、学生支援や学習環境整備について、十分な議論がなされてきたとは言えない。
この場合、学生支援とは、経済的支援にとどまらず、履修指導や、進路・就職相談等を含む。また、正課外教育の在り方、例えば、図書館等の学習環境や、部活動を含むキャンパスライフについても、質保証の観点からの検討が求められる。
- ・学生支援や学習環境支援の充実に当たっては、学生の多様化が進展している現状や、国の内外から幅広い年齢層の者が、学生や教員・研究者として集い、相互に交流しながら、学んでいく場をどう整えるかが課題となる。

（「中長期的な大学教育の在り方に関する第一次報告—大学教育の構造転換に向けて—」

平成21年6月15日中央教育審議会大学分科会）

【附属病院の機能強化】

- ・医療人養成の中核的機関である大学・附属病院の運営基盤を強化するとともに、地域の利用機関との密接な連携体制の構築を通じた医療分野における大学等の地域貢献の取組を支援

（「教育振興基本計画」平成20年7月1日閣議決定）

【高等専門学校施設の基盤の強化】

- ・高等専門学校の機能の充実を図るためには、基盤的経費を確実に措置するとともに、施設・設備の更新・高度化や優秀な教員の確保等が不可欠であり、これらの教育研究基盤の充実を図る。
- ・実践的・創造的技術者の養成を担う国立高等専門学校の重要性や、施設の整備状況を踏まえ、毎年度の施設整備予算を安定的に確保するなど、計画的な整備を支援していくことが必要である。

（高等専門学校教育の充実について 平成20年12月24日中央教育審議会）

5. 第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画の成果・効果の検証について (アンケート調査) 【抜粋】

「第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画(平成18年度～平成22年度)」(以下「第2次5か年計画」という)において整備した施設に関し、施設整備による成果・効果等について各国立大学法人等に対しアンケート調査を実施。

1. 調査の概要

(1) 調査内容

① 国立大学法人等の長を対象とした調査

・第2次5か年計画における大学全体としての施設整備の成果・効果や施設の現状等について調査

② 第2次5か年計画において整備した施設を利用している教員等を対象とした調査

・施設整備による教育研究等への効果や対象施設以外の施設の現状について、施設の区分別(教育研究施設、附属図書館、学生支援施設、附属病院)に調査

・調査対象の施設は、原則として第2次5か年計画の期間中に整備した全ての施設(耐震対策やアスベスト対策のみの事業等は除く。)を対象とし、棟単位で調査

(2) 実施期間 平成21年12月24日から平成22年2月2日まで

2. 調査結果

(1) 国立大学法人等の長を対象とした調査

・対象は、国立大学法人(86)、大学共同利用機関法人(4)、国立高等専門学校機構(1)で全法人から回答

(2) 第2次5か年計画において整備した施設を利用している教員等を対象とした調査

【教育研究施設】

・対象施設 526棟 ・抽出人数 5859人、回答数 3534人 (回答率 60%)

【附属図書館】

・対象施設 29棟 ・抽出人数 319人、回答数 218人(回答率 68%)

【学生支援施設】

・対象施設 63棟 ・抽出人数 601人、回答数 390人(回答率 65%)

【附属病院】

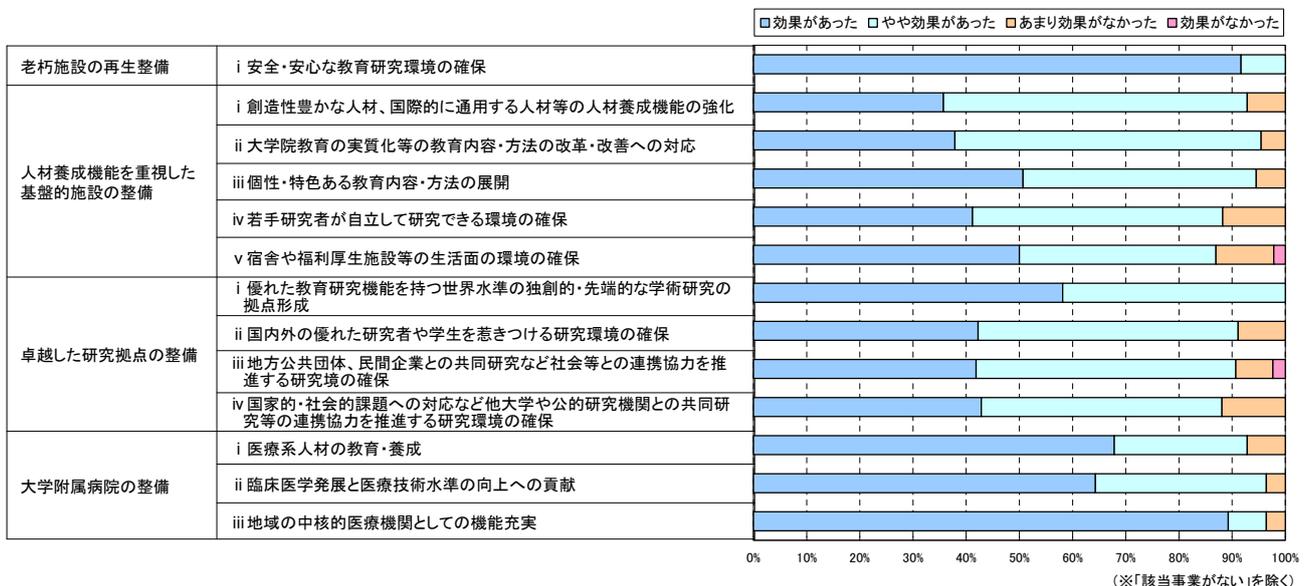
・対象施設 29棟 ・抽出人数 427人、回答数 268人(回答率 63%)

I. 国立大学法人等の長を対象とした調査結果

1. 第2次5か年計画の期間中に整備した施設による教育研究等への効果について(選択式)

全設問において、「効果があった」又は「やや効果があった」との回答が約9割であり、第2次5か年計画による施設整備により教育研究等へ一定の効果が現れていると考えられる。

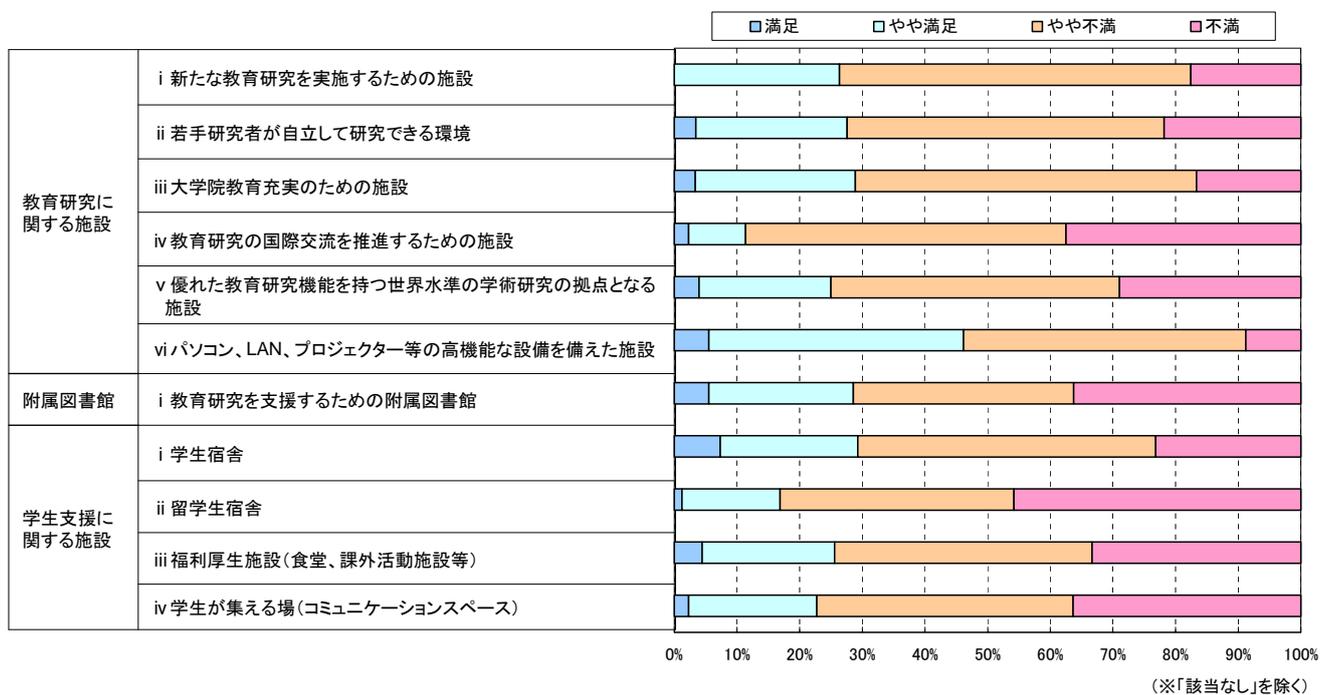
特に、「安全・安心な教育研究環境の確保」や「地域の中核的医療機関としての機能充実」については、「効果があった」との回答が約9割となっており、整備の効果が現れてきている。



2. 現在保有している施設の現状について（選択式）

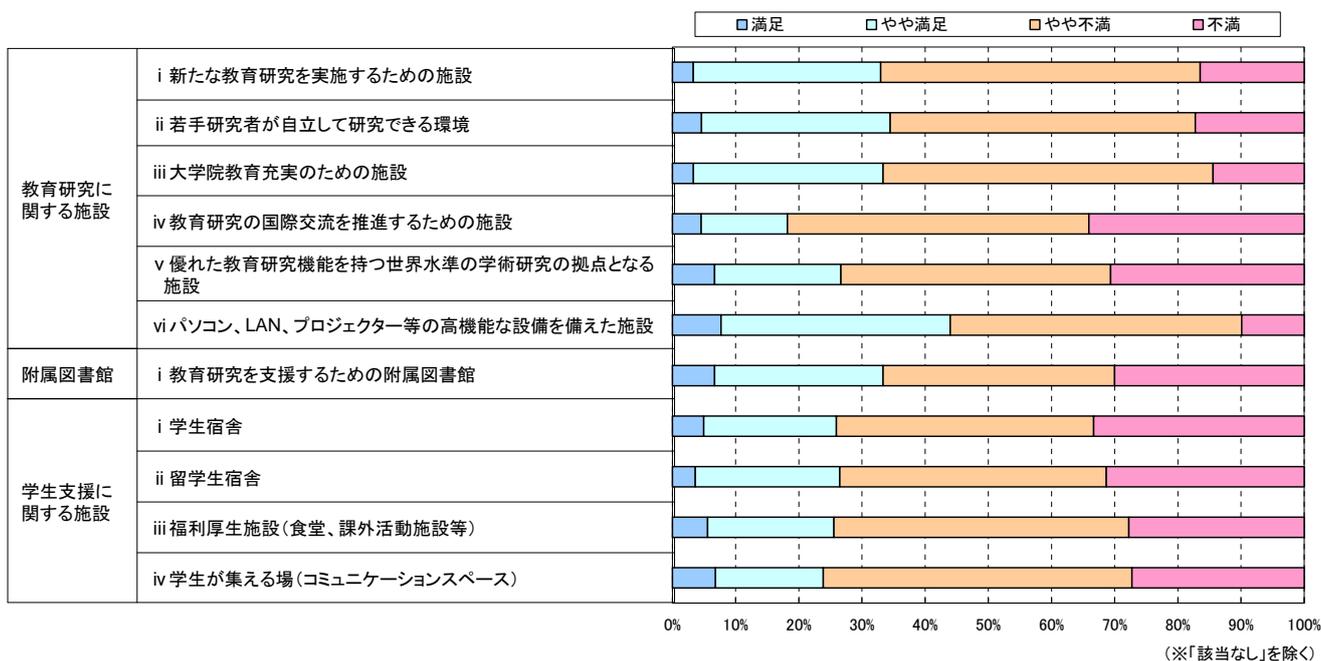
① 保有面積（量）の満足度

現在保有している施設の面積（量）に関する満足度については、「不満」又は「やや不満」との回答が約7割であり、特に「教育研究の国際交流を推進するための施設」や「留学生宿舍」については、8割を超えており満足度が低い。



② 保有施設の機能（質）の満足度

現在保有している施設の機能（質）に関する満足度については、「不満」又は「やや不満」との回答が約7割であり、特に「教育研究の国際交流を推進するための施設」については、8割を超えており満足度が低い。

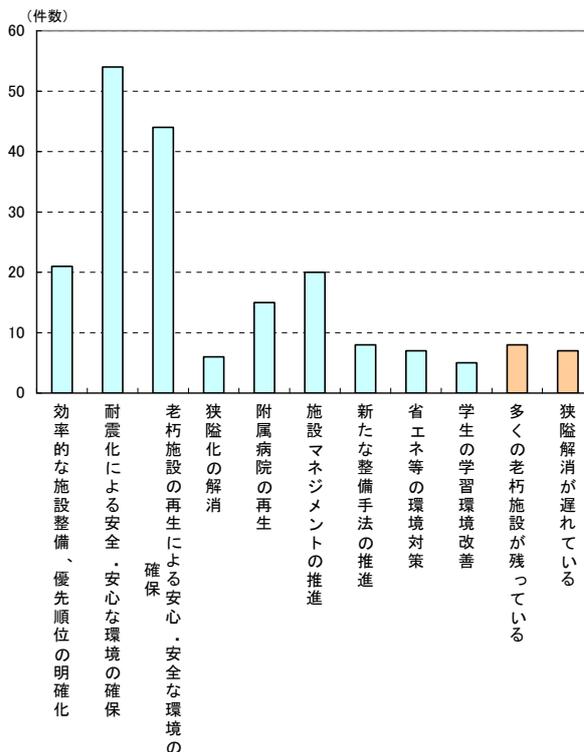


3. 各国立大学法人等における、第2次5か年計画を策定したことの効果・影響（自由記述）

第2次5か年計画を策定したことにより、各大学等においても、安全・安心な環境が確保されたこと、優先順位が明確になり計画的な整備が可能となったことや、施設マネジメントの推進や新たな整備手法の活用意識が高まったなどの回答が多い。一方、残っている老朽施設の解消や狭隘化の解消を引き続き求める回答もあった。

【回答の例】

- ・老朽施設の再生が最重要課題であったことにより、学内での老朽施設改修の整備優先順位確定の目安になり、計画的に順次改修を実施することが出来た。
- ・老朽施設の再生や耐震補強等により、安全・安心な施設が整備された。また、既存施設のスペース再配分により、若手研究者等が自立して研究できる環境が整備され、活性化していると考えている。
- ・文部科学省の施設整備施策の明確化と重点的支援により整備が推進されると共に、学内においても経営的視点に立った施設マネジメントの重要性・必要性に対する理解が深まった。
- ・学内においても国の施策に沿った整備方針について理解が図られたことにより具体的な施設整備の優先度に対する認識が図れ、整備の優先度が低い事業については自己資金の活用等新たな整備手法を模索して整備を行うようになった。
- ・老朽建物や大学施設・設備の機能改善が進められ、安全安心は着実に向上した実感がある。このことにより、学生の教育・研究に集中できる環境が整い始めていると思う。
- ・附属病院の再開発整備も最優先課題として明確にできたことで、病棟・診療棟の整備に着手でき、特定機能病院としてより高度先進医療を行える環境を提供し、災害拠点病院として地域に貢献できる環境が整うことは非常に重要である。
- ・第2次5か年計画の策定により、重点整備事業が絞り込まれ事業展開の方針が明確となり、全国一律の施設整備が推進されたことにより大きな効果が得られた。しかしその反面、大学の特色、独自性が打ち消されるというマイナス面も顕在化したと思われる。

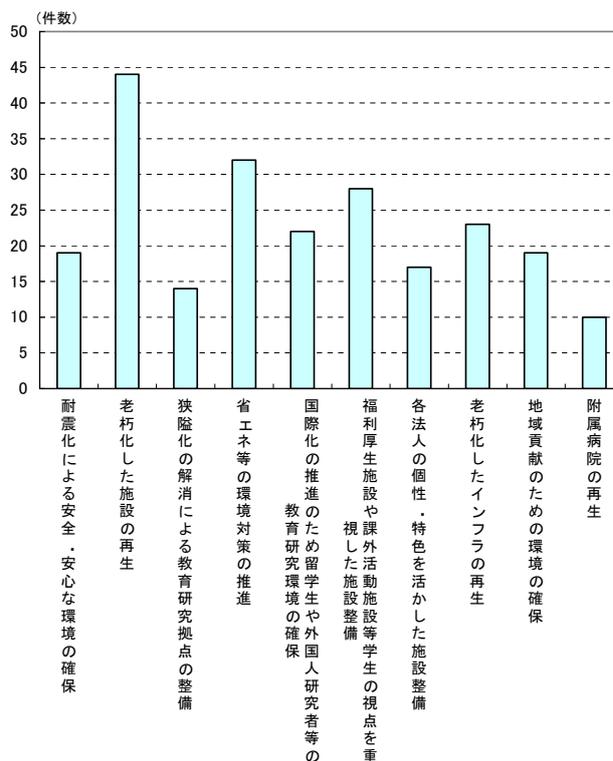


4. ポスト5か年計画の盛り込むべき観点等について（自由記述）

ポスト5か年計画に盛り込むべき観点として、引き続き老朽施設の再生整備を行うとともに、学生の視点を重視した施設整備や国際化の観点から留学生や外国人研究者を受け入れる環境の整備、省エネルギー対策等の環境に配慮した整備を行うことが必要との回答が多い。また、各大学等の個性や特色、地域性に応じ多様なニーズに対応できるよう求める回答もあった。

【回答の例】

- ・安全安心、老朽改修、卓越した研究拠点の計画的重点的な整備や、CO2削減に配慮し、資源、エネルギーの有効活用に努め、機能的効率的キャンパス創りを引き続き推進することは重要である。
- ・大学施設が安全安心な施設に再生されることは引き続き必要であるが、加えて、学生にとって魅力のあるキャンパス及び学生支援施設が充実していることが重要と考える。
- ・学生教職員の福利厚生に関する部分の施設整備が遅れている。大学の基礎力として教育力や研究力が求められる事は当然だが、学生（留学生を含む）や研究者にとって魅力ある生活環境を整備し、「学びたいキャンパス・研究をしたいキャンパス」であることも必要である。特に地方大学では都市圏に比べ立地や地域経済面でのハンディもあり、自助努力だけでは及ばない部分がある。
- ・我が国の経済的発展や国際的役割の進展のために「国際化」の観点からの施策（研究者・留学生受入れ施設等）を希望する。
- ・盛り込むべき観点としては、①経年劣化し老朽化した施設、基幹設備等の改修整備②各大学の特色ある取組み等に係る施設整備③大学病院関係の施設整備
- ・国立大学法人の施設は単なる建設投資ではなく、将来の我が国を支える根幹となる「人」への投資であることを第一に示して頂きたい。また、キャンパス施設の改善は地球環境の改善に向けて、ソフト面での教育効果とハード面での温暖化ガス削減の両面に対して効果が直結するものであることも重要と考えている。

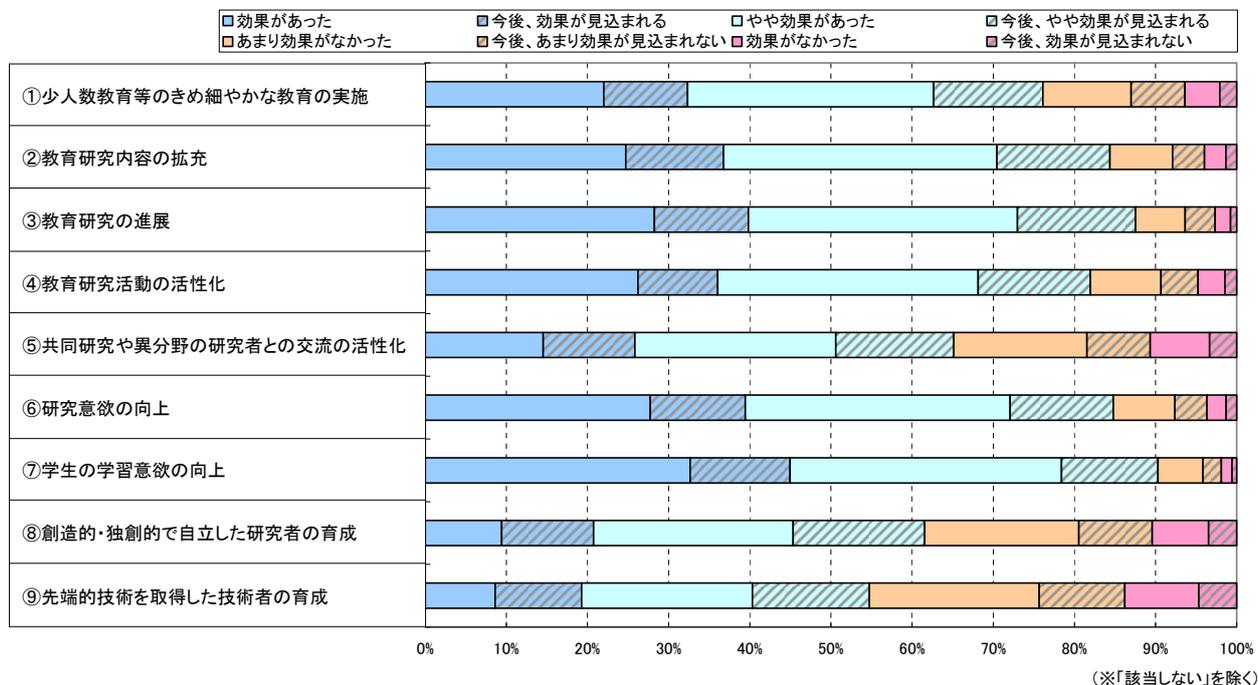


II. 整備した施設を利用している教員等を対象とした調査結果

1. 施設整備による教育研究等への効果について（選択式）

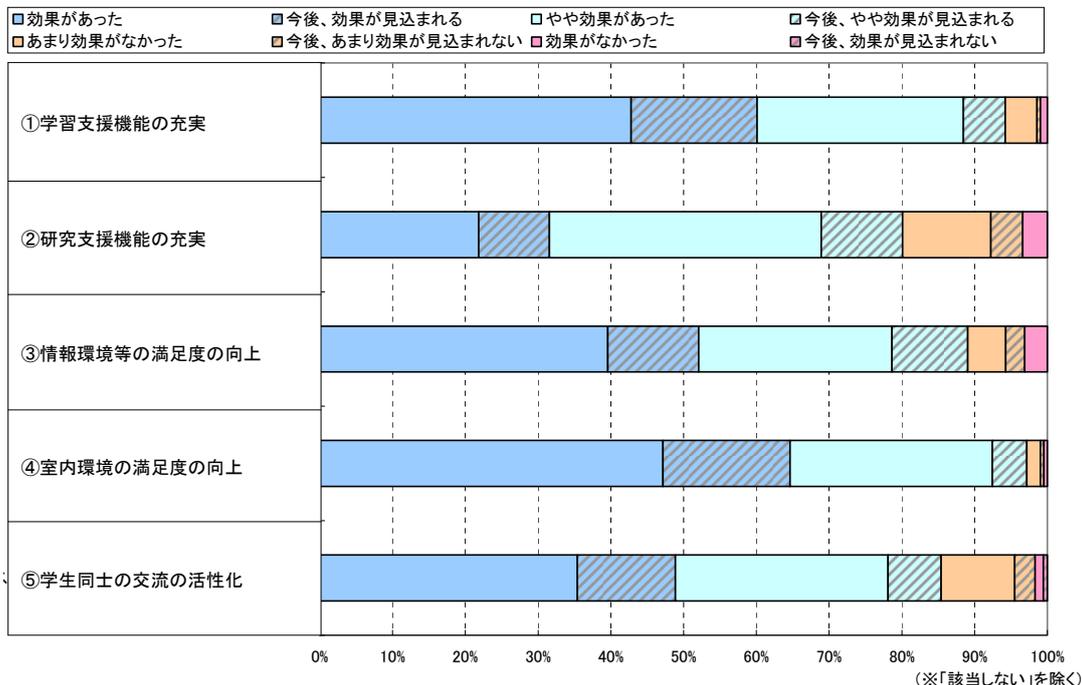
教育研究施設

全体的には「効果があった（見込まれる）」又は「やや効果があった（見込まれる）」との回答が多く、教育研究施設の整備により教育研究等へ一定の効果が現れていると考えられる。特に「学生の学習意欲の向上」や「教育研究の進展」等との回答は8割を超えており、整備の効果が現れている。



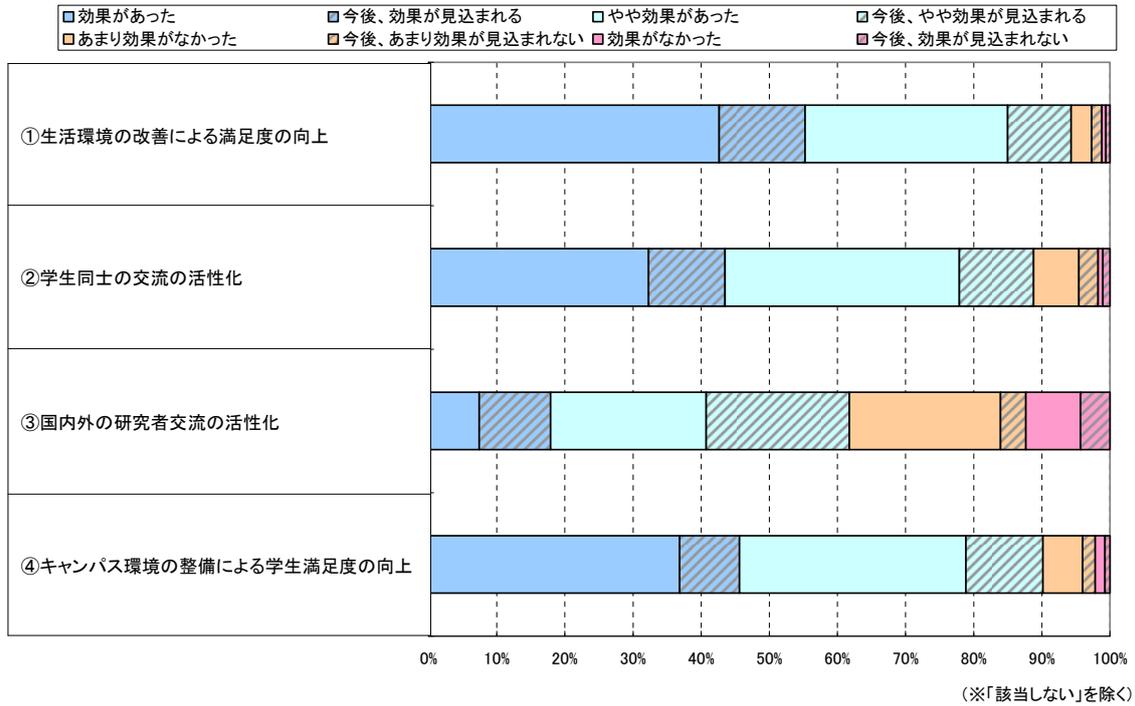
附属図書館

全体的には「効果があった（見込まれる）」又は「やや効果があった（見込まれる）」との回答が多く、附属図書館の整備により教育研究等へ一定の効果が現れていると考えられる。特に「室内環境の満足度の向上」や「学習支援機能の充実」等との回答は9割を超えており、整備の効果が現れている。



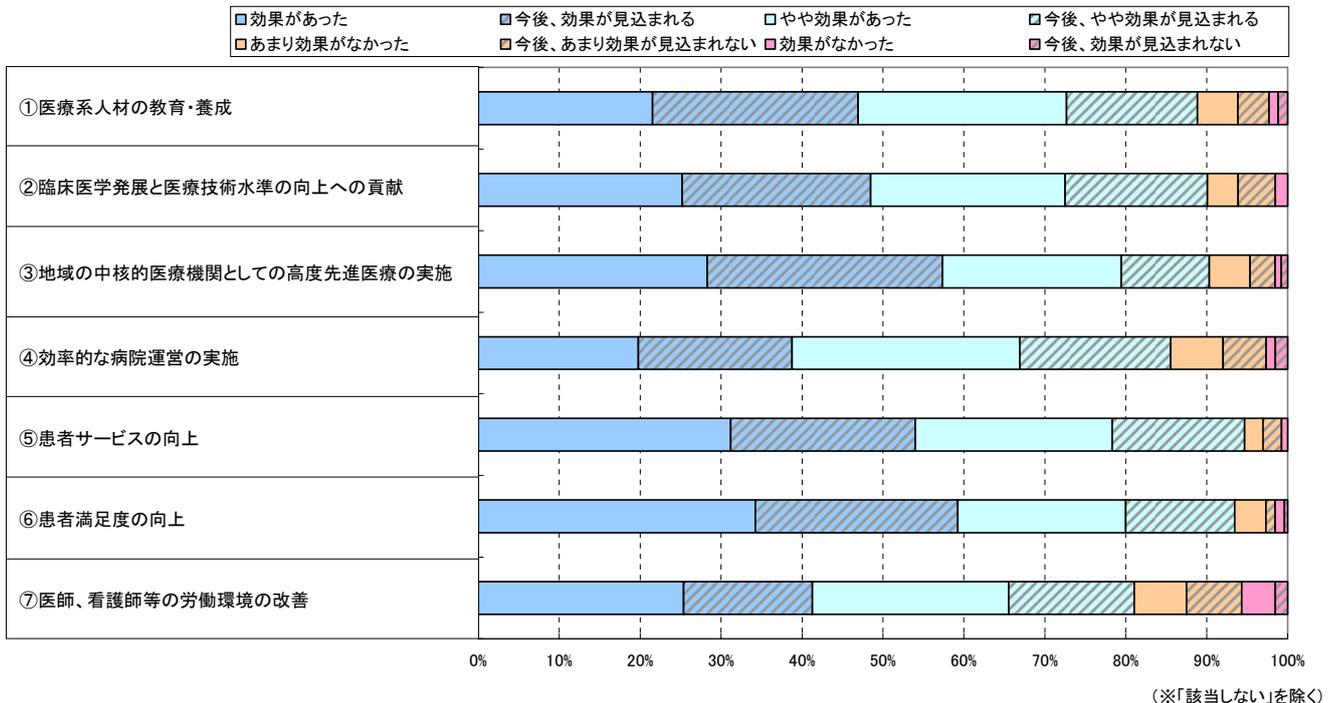
学生支援施設

全体的には「効果があった(見込まれる)」又は「やや効果があった(見込まれる)」との回答が多く、学生支援施設の整備により教育研究等へ一定の効果が現れていると考えられる。特に「生活環境の改善による満足度の向上」や「学生同士の交流の活性化」等の回答は約9割となっており、整備の効果が現れている。一方、「国内外の研究者交流の活性化」については、約6割となっている。



附属病院

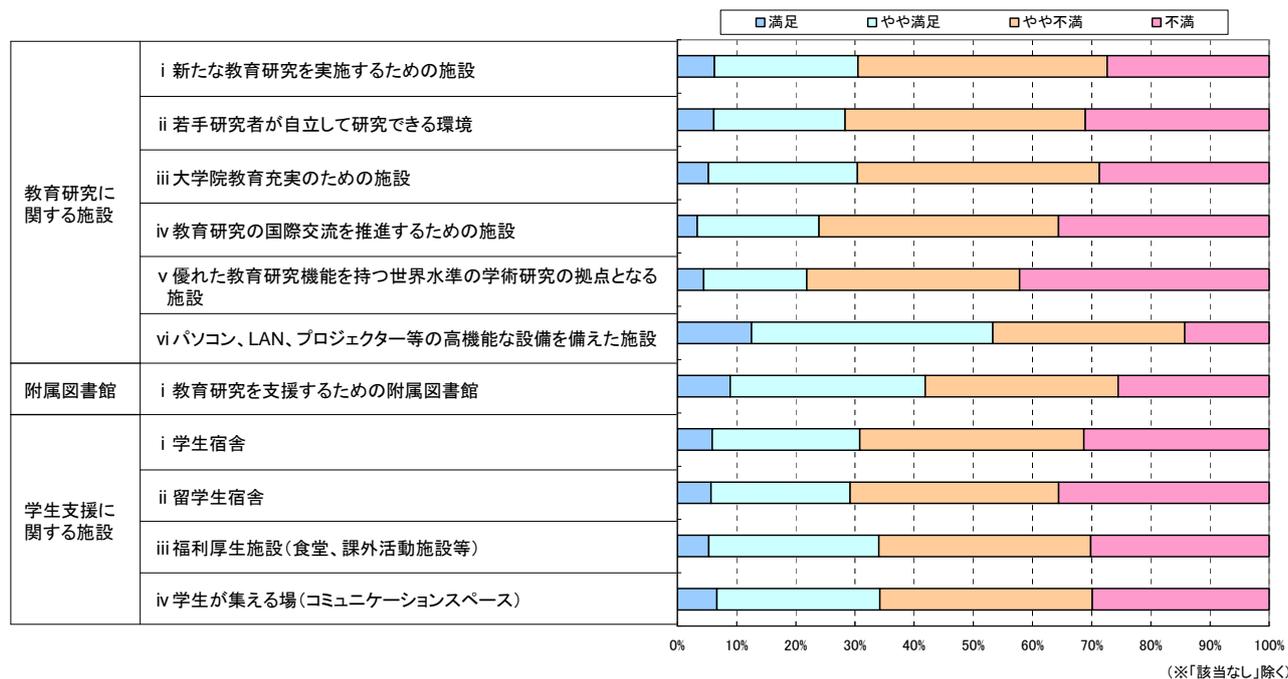
全体的には「効果があった(見込まれる)」又は「やや効果があった(見込まれる)」との回答が多く、附属病院の整備により教育・研究・診療へ一定の効果が現れていると考えられる。特に「患者サービスの向上」や「患者満足度の向上」等の回答は9割を超えており、整備の効果が現れている。



3. 現在保有している施設の現状について（選択式）

①保有面積（量）の満足度

現在保有している施設の面積（量）に関する満足度については、全体的に「不満」又は「やや不満」との回答が多く、特に「優れた教育研究機能を持つ世界最高水準の学術研究の拠点となる施設」や「教育研究の国際交流を推進するための施設」については、約8割となっており、満足度が低い。



②保有施設の機能（質）の満足度

現在保有している施設の機能（質）に関する満足度については、全体的に「不満」又は「やや不満」との回答が多く、特に「優れた教育研究機能を持つ世界最高水準の学術研究の拠点となる施設」や「教育研究の国際交流を推進するための施設」については、8割弱となっており、満足度が低い。

